こんにちは 神山えつこです

No.124／2006.9

発行・・日本共産党郡山・安達地区委員会
〒963-8865 郡山市桑野清水台48-8 後藤ビル1F ☎922-3801 FAX932-1903
Eメール jp-ko-ada@hotmail.co.jp

泉崎村・幼児虐待死事件

何度も指摘

相談体制の不備が悲しい現実に

聞き取り調査に入って

村の対応には限界

泉崎村で起きた3歳児の虐待死事件で、8月3日泉崎村へ、4日は福島市の中央児童相談所を訪ね聞き取り調査をしました。

今年4月着任したばかりの泉崎村の女性課長さんは「村としては精一杯やってきた。あまりにひどいと感じて、今年4月23日に県に実態を見て欲しいとお願いし、やっと一ヶ月後に見に来てくれたが、その数日後に亡くなるなんて、なぜもっと県に強く言えなかったのかと悔やまれる」とつらい心情を語ってくれました。

8/4 県中央児童相談所の次長に聞く

中央児童相談所では、2000年に東京の児童相談所から県へ連絡が入り、ここから中央児童相談所が関わってきており、「リスクが多い家庭」との認識はあったものの、"3人の子どもを一度に救出することにこだわって、判断の甘さがあった"と申し陳謝しました。

村からの情報収集に切り替えた県

子どもの措置の最終決定をするのは児童相談所です。ところが県は、05年に二女が小学校入学を機会に、直接訪問をやめて泉崎村からの情報収集に切り替え、ケース検討会の協議ですませてきたのです。いくら人員が不足しているとはいえ、ここは大きな判断ミスだったのではないか。

さらに、今年4月二男が入学した時も、そのあまりの発達の遅れ（身長は2歳児、体重は1歳児程度）に、一様に驚きの声が上がったそうです。これだけでも緊急を要する事態だったはず。

再三県議会でも追及

郡山に独立した児童相談所を

こんな悲しい事件を二度と繰り返してはなりません。初当選した99年12月議会と9月議会で「郡山の分室を児童相談所へ格上げすべき」と質問し、その後も01年2月議会と9月議会で取り上げ、ようやく02年9月より郡山相談センターとなりましたが、一部格上げにとどまっているため、再度05年2月の総括質疑で「福祉司の増員と郡山相談センターを児童相談所に独立させよ」と求めてきました。

県知事に申し入れ 8/7

また、今年8月7日、この事件に関しての聞き取り調査結果を踏まえて「再発防止をはかるためにも、現在3カ所しかない児童相談所を5～7カ所に。なかでも県土の真ん中にありながら中途半端な郡山相談センターは一刻も早く、一時保護施設を備えた児童相談所として独立させるべき」と、あらためて県知事に申し入れました。

県土の真ん中（郡山）に児童相談所がない！

＜現行体制＞

県内人口	2,091,223人	（平成17年度国勢調査）
中央管内	1,224,969人	
会津管内	310,919人	
浜管内	555,335人	

◆児童相談所の数 3ヶ所
（1センター6分室～上の図）

◆児童福祉司の数 31人
（06年に5人増員）

中央児童相談所	16人
会津児童相談所	7人
浜児童相談所	8人

8/7 要望書を受け取る保健福祉部の佐藤総括参事

私の提案 04年に改正された国基準からみれば、「4～5ヶ所、できれば7つの生活圏ごとに1ヶ所ずつ、42人体制」で行なうべき。

郡山から見た 県政ア・ラ・カルト

風雲急!! 県政は激震 市政は混迷

「仕事は山ほどある福島県」で 県のシンボル事業に検察の手

「砂糖にむらがる蟻」のごとく、それまで福島に縁もゆかりもない、遠くの建設業者が十年以前から県内に進出し始めた。「福島には仕事が山ほどある」と。この時期は県関係の大型公共事業が目白押しの状態。福島空港の滑走路延長、首都移転、未来博、小名浜港建設、あぶくま高原道路（トラヘイ）工事、木戸ダム着工など当時不況にあえぐ建設業者にとっては、のどから手の出るほどおいしい話▼なぜか、これら事業の最盛期に、造田業者と県知事実弟企業との金銭関係が発生している。検察はこれを当初から脱税事件でなく「福島疑惑」として注視し、ついに県のシンボル事業のトラヘイの追及に着手した。共産党県議団は一貫してこの事業は不要不急のムダ使いとして問題にしてきたが、これらの疑惑の裏で、県民生活の小さな願いもふみにじられている現実がある。

希望の千円と疑惑の一億円の落差 「共生の県政」の原点はどこに

神山県議が先日福島の知的障がい者通所施設「父の夢」を訪問した時の事。園児が日程表の「三十日給料日」を「これこれ」と嬉しそうに指さして教えてくれた。彼らが和紙やパンを作って販売しその中から千円程度のお給料をもらえる日なのだ。自分なりに一生懸命働いて得た、自負と希望の千円なのだ▼県は四月からこれら施設への補助金一七〇〇万円をカットしたが、関係団体や共産党県議団の抗議で撤回した。一方、水谷建設が知事実弟の会社に内容不明の一億円の送金が県政との関わりで問題になっている。県政のトップにある人は「千円と一億円」の重さと格差についてよく考えてほしい。「共生の県政」のスローガンに恥じないように。

身から出たサビで市政が立往生 ハラハラ市政は、はや消化仕合か

県知事の周辺のあわただしさと疑惑は、知事が責任もつ県政との関連で深刻であり、与える衝撃も大きい。一方、郡山市長の問題は、政治実績以前のドタバタ劇以外の何物でもない。「前市長の失政は選んだ市民の連帯責任だ」の発言に始まり、後援会のパーティー券事件まで、全て市長個人の身から出たサビとしか表現しようがない▼首長がでくの坊でも幹部職員が普通の状態であれば、機能している自治体もある。ところが当市は全部長がXデーを前に、身も心もそぞろ。市長の日程は各種会合での挨拶、顔出しが精一杯。郡山市政の混迷は根が深い。市長個人が辞職すれば治まる。